

2012.7.8

読書

気象学者が幸せだった頃

いつ頃、どんな地震が起きるのかは現在の地震学では、とても予測できない。学問の実力以上の期待が寄せられると悩む地震学者たちに先日、ある気象学者がこんな話をした。

天気予報の世界では1950年代、学問としての地球流体力学が確立するとともに、コンピ

ューターを使った数値予報が開発され、その後はスパコンの性能向上とともに予報精度も上がった。幸せな時代だった。

基礎研究が社会の負託にこたえた、日本のそんな時代を描いたのが、「人と技術で語る天気予報史―数値予報を開いた―」金色の鍵▽(古川武彦著、東京大学

出版会)だ。戦後間もない貧しい環境の中で地球物理学者たちが数値予報に取り組み、必要性を認めたと大蔵省は破

格の予算をつけて1959年、米国製の大型計算機を購入。やがて力を付けた国産のスパコンが取って代わる。産官学連携の成功例とも言えるだろう。先月、稼働を始めた気象庁の



最新のスパコンの計算速度は1秒間847兆回。初代機、IBM 704の同1万回は遠い昔だ。だが社会の問いも、明日の天気だけでなく、地球温暖化の将来というような予測困難な領域に向かって

いる。気象学者の悩みも、地震学者に似てくるのかもしれない。(滝田恭子)

*「学ぼう わかるサイエンス」面へのご意見は科学部へ。ファクス(03・3217・8169)か、電子メール(t-kagakubu@yomiuri.com)でお寄せ下さい。